

子供の電話会話における終結部の分析

— 成人との比較から —

伊藤明子・杉山ますよ・八若寿美子・藤井桂子

要 旨

会話には、文化に固有の伝達様式があると考えられる。電話会話の終結部においても文化による異なりがあることが報告されている (Clark & French 1981、岡本1990、小野寺1992、藤原1998)。ところで、子供はこうした伝達様式を成人と同じように用いているのであろうか。本稿では、日本人の子供が電話会話において、どのようにして会話を終わらせているかを、「電話会話の終結部を構成する機能単位」「電話会話の終結部構造の複雑さ」という観点から、成人の電話会話と比較し分析した。その結果、1) 子供の電話会話の終結部では、人間関係の維持を配慮した「人間関係の再肯定」の機能単位が成人ほど使われていない、2) 機能単位の出現頻度・種類・ターン数のいずれも成人より少なく終結部の構造が単純である、という特徴が明らかになった。

【キーワード】 子供の電話会話、電話会話の終結部、機能単位、複雑さ、人間関係の再肯定

1. はじめに

近年、日本では電話は子供にとっても欠かせないコミュニケーション手段となっている。子供同士の電話を聞いていると、「相手に不快感を与えないか」と思うほどそっけなく電話を切ってしまうことがよくある。子供の電話会話の終結のやりとりに物足りなさやそっけなさを感じるのは、終結方法が成人とは異なっているためであろう。

社会において円滑なコミュニケーションを行うためには、言語の音声的、形態的、統語的規則だけでなく、伝達様式の慣習など場面に応じた言語使用を身につけることが要求される。「会話終結には文化固有の方法がある」 (Clark & French 1981、Bardovi-Harlig and Hartford 1991) との指摘があるように、電話会話の終結にも文化特有の慣習や方法があると考えられる。子供の電話会話終結の物足りなさはこのような伝達様式の慣習が十分に遂行されないことによると思われる。本稿では、子供と成人

の電話会話終結のメカニズムは、実際にどのような点が異なっているかを探る。

2. 先行研究

電話会話終結部の研究は、実際の社会的相互作用のやりとりを詳細に分析することに主眼をおいた「エスノメソドロジー」の分野でとりあげられてきた。Schegloff & Sacks (1973) は、自然な会話終結は、「これ以上話す事柄がない」ことを示し相手の同意を得ることによって終結部を導く「前終結 (pre-closing)」と、最終的やりとりを含む「終結 (closing)」の二つの部分からなることを示した。

Clark & French (1981) は Schegloff & Sacks のモデルの修正を試み、終結部が 1) 「話題終結 (topic termination)」、2) 「いとまごい (leave-taking)」、3) 「接触終結 (contact termination) の三つの部分からなるとした。「話題終結」は Schegloff & Sacks の「前終結」にあたるもので、「接触終結」は電話を切る行為のことである。Clark & French が提案したのは、「人間関係の再確認 (reaffirmation of acquaintance)」の機能を果たす「いとまごい」という構成要素である。これは、前終結に続く部分で、会話の進展を停止させるというマイナスの影響を修正するため社会的接触再開を確認しあう過程である。この構成要素は任意であるため、かけ手・受け手が会う可能性がない場合は省略されることもあり、文化によってその有無や複雑さに差があることを指摘している。

これらの欧米の研究を基に、日本語においても実際の電話会話をデータとした終結部の研究が行われている。小野寺 (1992) は、終結部は「前終結」「人間関係の再確認」「最終的やりとり」という段階を踏むとし、一人の主婦の1週間の電話会話をもとに日本語では各段階でどんな表現が発話されるかを分析した。その結果を Schegloff & Sacks、Clark & French の結果と比較し、日本語の終結部に「謝り」などのネガティブ・ボライトネスが用いられることが多いことを指摘した。

藤原 (1998) は、小野寺の研究は被験者が一人であるため一般化が難しく、日米比較の社会言語学的コンテクストが揃っていないという問題点があるとし、20代の同性の友人同士という共通した条件の電話会話 (被験者数112名) をデータとして終結部の日米比較を行った。終結方法の複雑さを中心に分析した結果、1) 日本人は「人間関係の再肯定」で「依頼表現」をよく使うがアメリカ人は使わない等、両者は異なる機能単位を用いて終結構造を作る、2) 日本人の方が一会話におけるターン数、機能単位の出現度・種類数が多く、その終結部構造はアメリカ人より複雑であると結論づけてい

る。これらの研究の結果は、成人による電話会話がかけ手・受け手の協力のもとに一定の方法で終結に至り、その方法は文化によって差があることを示すものである。

子供の電話会話については、Holmes (1981) が、8歳の子供と成人間の英語の電話会話を成人同士のもの、開始部、最初的话题提示、フィードバック、終結部について比較している。その結果、8歳の子供は始めや終わりの挨拶など電話会話の規範をかなり習得しているが、終結部については前終結を経ずに最終的やりとりをしたり、成人の開始した前終結の隣接ペアが完了できなかつたりすることを指摘している。Holmes は、その理由として、聞き手のニーズに対する配慮がまだ十分ではない発達段階であることをあげている。また、親は始めや終わりの挨拶は教えることができるが、前終結の構造などについては無意識であるため明示的な指示ができず、これらは他の社会言語的能力と同様に経験を基礎として習得されることも理由としている。

日本語の子供の電話会話終結部に関する研究は筆者が知るかぎりではまだない。本稿の意義は、実際の電話会話をデータとした調査を行い、日本語における子供の電話会話終結部の特徴の一端を示すことである。

3. 研究の目的

本稿では、小野寺・藤原に従い、終結部では「前終結」「人間関係の再肯定」「最終的やりとり」という段階があるととらえ、藤原が日本人の電話会話終結部の文化的特異性としてあげている「複雑さ」に着目して、成人間と子供間の電話会話終結部の比較を試みる。具体的には以下の二点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 子供と成人とでは、電話会話終結部を構成する機能単位にどんな違いがあるか
- (2) 子供と成人の間で、電話会話終結部構造の複雑さにどのような差が見られるか

4. 調査

4-1 データ

複数の家庭で電話会話を収録し(1998年12月～1999年2月)その内日本語母語話者同士の会話で明確な要件を持つ34例を文字化した。今回は成人間の会話16例、子供間の会話17例を分析対象とした。いずれも既知の間柄同士である。被験者は40名で、成人21名(男1、女20)子供19名(男6、女13)。年齢は、成人20代3名、30代3名、40代15名、子供9歳2名、10歳5名、12歳5名、13歳1名、14歳3名、16歳3名である。

4-2 分析の方法

藤原（1998）は、「複雑さ」の指標として、終結部における「機能単位の出現度」「機能単位の種類」「ターン数」を用いている。本稿では、これら藤原の指標を基に(注1)、子供と成人の電話会話の終結部を比較する。終結部の構成要素となる「機能単位」については、以下に示す藤原（1998）の分類に従った。

◆機能単位の分類

A. 前終結（pre-closing）

- 1) 会話内容をまとめる。 例) 「そういうわけで」等のメタ言語的・総括表現
- 2) 会話内容から導き出される行動の確認 例) 「予約いれとくわ」
- 3) 会話中の話題の再利用
 - a. 初めにした約束の繰り返し 例) 「9時だったよね」
 - b. 電話した理由を述べる。 例) 「それが聞きたかっただけやねん」
- 4) 会話の流れの調子を変える。
- 5) 外部事情によって一方的に終結を開始する。
 - a. 相手の利益、権利に触れる。 例) 「長くなると悪いから」
 - b. 自分の事情を持ち出す。 例) 「もう家出なあかんねん」
- 6) 終結を導くあいづち・ディスコースマーカ 例) 「はい」「それじゃあ」

B. 人間関係の再肯定（reaffirmation of acquaintance）

- 1) 接触継続についての言及（注2） 例) 「また電話するね」「水曜日にね」
- 2) 感謝 例) 「電話ありがとう」
- 3) 謝罪 例) 「ごめん」「すみません」（注3）
- 4) 依頼表現 例) 「よろしくお願いします」
- 5) 相手の健康・幸せについての配慮
 - a. 健康を気づかう 例) 「体に気をつけてね」
 - b. 幸せを祈る 例) 「よい週末を」
- 6) 伝言 例) 「おばちゃんによろしく」
- 7) 相手・互いに対する励まし 例) 「がんばってね」
- 8) 互いの出会いの喜びの表明 例) 「話できて良かったわ」

C. 最終的やり取り（terminal exchange）

- 1) 別れの挨拶 例) 「バイバイ」「じゃあね」「おやすみ」
- 2) 別れの挨拶以外で会話を終らせる。（注4） 例) 「はい」

以下、データの中から子供の会話、成人の会話の分析例をあげる。

<例1>子供の会話 (C:女性12歳 R:女性12歳) C: 電話のかけ手
 1C: うん、まじびびったよ。 R: 電話の受け手
 2R: うん…… (A-6) 数字: 発話番号
 3C: @@@そーいうこと。…… (A-1) [: 発話途中 [以下が次の行
 4R: うん、分かった。…… (A-6) (A-1) の冒頭 [以下と重なる
 5C: うん、じゃーねー。…… (A-6) (C-1) =: 前の発話にすぐ続くもの
 6R: はーい。…… (C-2) @: 笑い

<例2>成人の会話 (C:女性 40代 R:女性 40代)

1C: 皆で話しながらやってるから。
 2R: あ。
 3C: うんうん。じゃあ。…… (A-6) (A-6)
 4R: =はい。…… (A-6)
 5C: すみません。お願いし [ます。…… (B-3) (B-4)
 6R: [ありがとうございます [ました。…… (B-2)
 7C: [はい、おやすみ [なさい。…… (A-6) (C-1)
 8R: [おやすみなさい。…… (C-1)

5 結果と考察

5-1 結果

5-1-1 機能単位の分布

ここでは「前終結」「人間関係の再肯定」「最終やりとり」の各段階について、子供と成人とでは用いる機能単位の種類にどのような相違があるかを比較していく。

◆前終結における機能単位の分

<表1>

左は出現数
 () 内は割合

	子供 (%)	成人 (%)
DM、あいづち	25 (52.1)	78 (80.4)
行動の確認	08 (14.6)	07 (7.2)
会話内容のまとめ	16 (33.3)	10 (10.0)
話題の再利用	0 (0)	02 (2.1)
外部事情	0 (0)	0 (0)
調子を変える	0 (0)	0 (0)
合計	49 (100)	97 (100)

「前終結」の各機能単位の出現数と出現の割合は表1のようであった。成人は「ディスプレイマーカー (DM)、あいづち」が約8割を占めている。子供は「DM、あいづち」は最も高い数値を示しているものの約5割に留まり「会話内容のまとめ」「行動

の確認」の割合が成人に比べ高い。使用された機能単位の種類は、子供では上述の3種類であったが、成人ではこれらに「話題の再利用」を加えた4種類であった。

◆人間関係の再肯定における機能単位の分布

「人間関係の再肯定」では、表2に示すように成人は6種類の機能単位を用いているのに対し、子供は3種類であった。成人では「謝罪」「依頼」「感謝」の3つの機能単位がこの順で数値が高い。一方子供では機能単位の出現数合計が5例と数自体が少なく、その内3例が「感謝」であった。成人に多い「謝罪」「依頼」は子供においては1例もなかった。

<表2>

左は出現数

() 内は割合

	子供 (%)	成人 (%)
接触継続	1 (20.0)	05 (12.5)
感謝	3 (60.0)	09 (22.5)
謝罪	0 (0)	14 (35.0)
依頼	0 (0)	11 (27.5)
健康・幸せ	1 (20.0)	01 (2.5)
伝言	0 (0)	0 (0)
励まし	0 (0)	0 (0)
出合いの喜び	0 (0)	0 (0)
合計	5 (100)	40 (100)

◆最終やりとりにおける機能単位の分布

「最終やりとり」では、子供、成人とも「別れの挨拶」が主となっているが、子供の方が割合も実数も多い(表3)。子供がより積極的に「別れの挨拶」を用いていることがわかる。成人の場合明確な別れのことばではなく「人間関係の再肯定」に分類した「謝罪」「依頼」「感謝」の表現で会話を終えているものも多い。表3の数値に直接現れていないが、その割合は、かけ手受け手の最後の発話の約4%あった。

<表3>

右は出現数

() 内は割合

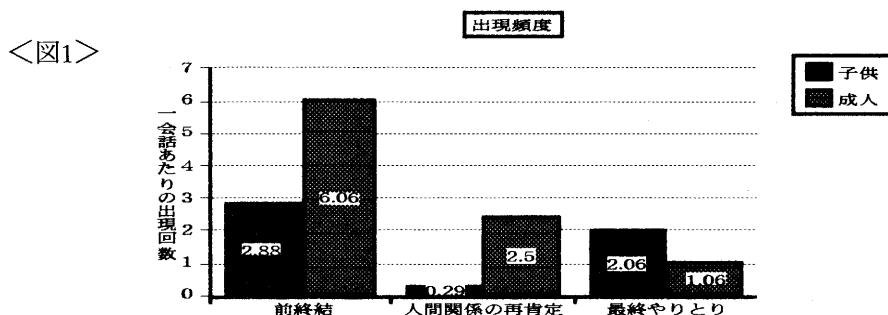
	子供 (%)	成人 (%)
別れの挨拶	31 (88.6)	13 (76.5)
挨拶以外	04 (11.4)	04 (23.5)
合計	35 (100)	17 (100)

5-1-2 機能単位の出現頻度

次に、終結部全体の機能単位の出現頻度を比較する。一会話あたりの平均で見ると子供は5.23回、成人は9.62回で、成人は子供の約2倍の数値を示している。つまり、成

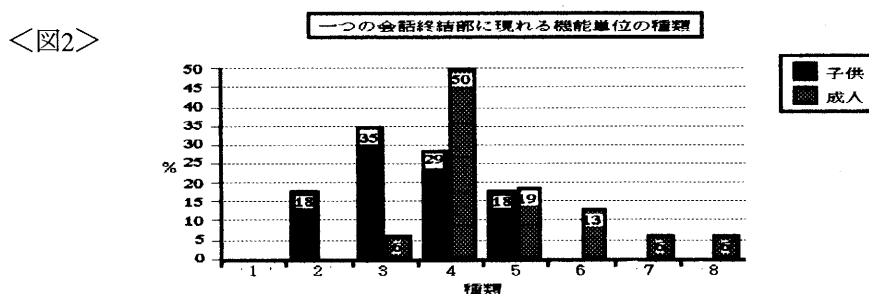
人は会話を終結に導くために 2倍近い数の機能単位を用いていることがわかる。

図1は、この数値を「前終結」「人間関係の再肯定」「最終的やりとり」の3つに分けて示したものである。ここでは、1)子供、成人とも「前終結」の機能単位を最も多く用いているものの、成人の頻度は子供の2倍強ある、2)子供は「人間関係の再肯定」の機能単位をわずかしか用いていないが、成人は8倍強の割合でこれを使用している、3)「最終的やりとり」は子供の方が数値が高い、ことが読み取れる。



5-1-3 機能単位の種類

図2は、子供と成人が何種類の機能単位を一回の終結部で使ったかを比較したものである。成人は3~8種類の機能単位を使用し、4種類用いている会話が全体の50%で最も高い数値を示している。子供は2~5種類の機能単位を使用し、3種類の場合が35%で最も高い。平均値を出すと、子供は3.47種類で成人は4.81種類となる。成人の方が子供より多くの種類の機能単位を使用していることがわかる。



5-1-4 会話終結部におけるターン数

最後に、もう一つの複雑さの指標として「ターン数」を比較する。初めの終結部の

機能単位が現われてから最終発話がなされるまでの会話終結部のターン数を比較した結果、成人16会話の終結部の平均は6.93ターンであった。一方、子供17会話の平均は4.64ターンで、成人より2.29少ないターン数で会話終結を行っていることが分かる。この結果は、成人の会話終結部の方が子供より長く、やりとりの手間がより多くかかっているという特徴を示している。

5-2 考察

まず、「前終結」について見ると、子供が会話を終結に導くために用いる機能単位は成人に比べ種類も数も少ないことがわかる。成人がいくつもの機能単位を使い手間をかけてお互い「もうこれ以上話す話題がない」ことを確認し合うの対し、子供は少ない機能単位で簡単に手続きを行っている。子供の場合、前終結で用いる表現自体限られており「わかった」（注5）の多用が目立った。これが話題終了の明確な合図となりそのまま一気に会話が終結へ向かうケースが多かった。Holmes(1981)の指摘にあるように、前終結が隣接ペアにならないものもあったが、その場合でも相手の発話が終結への合図として子供に解釈されていた。子供の電話は成人から見れば、伝達様式という点ではまだ完全でないが、単純化された形で手続きを進めていると言えよう。

一方、Holmes(1981)の「子供の場合、前終結を経ずに最終やりとりをするパターンがよく見られる」という指摘については、今回の調査では当てはまるようなケースはなかった。これは、今回の調査では、対象とした子供の年齢が高かったこと、子供同士が既知の間柄であったこと、遊びの約束など用件の終わりがわかりやすく終結の同意が得られやすい電話内容が主であったことなどが影響していると考えられる。

「人間関係の再肯定」の機能単位については、子供の場合、この出現頻度が極めて少ない点が大きな特徴である。電話終結に際して相手との肯定的な関係を損なわないために成人が行うような手続きは、子供にとっては必須のものではない。終結部を構成する基本的な要素は、前終結と最終やりとりの2つの段階ということになる。前終結の機能単位が現れることにより会話は急速に終結へ向かい、はっきりとした別れの挨拶で、終結が完了している。成人に比べ極めて単純である。一方、成人では、前終結、人間関係の再肯定の機能単位を繰り返し使って念入りに手続きを進め、会話を終結へと導いている。こうした違いがターン数の違いにも反映されていると言えよう。

「最終やりとり」に関しては、成人の出現頻度が子供より少ないのは、先にも述べたように感謝、謝罪、依頼といった人間関係の再肯定の表現で最終やりとりを済ます

場合も多い為である。終結手続きの過程で、こうした表現は具体的な感謝、謝罪、依頼の意味だけでなく、話が終り、会話終結の局面が目の前に来ていることを間接的に示す働きをすることになる。直接的な別れの挨拶をあえて言い出さなくても会話終結の最終時点と了解し合えるのである。終結間際の部分に見られる話し手同士の発話の重なりも、終結の最終的な責任を負わないためのストラテジーと考えられる。成人の場合、子供にはあまり見られない複雑な伝達様式が存在していると言える。

以上、終結部を構成する機能単位の出現頻度、種類、ターン数を比較した結果、結論として(1)子供の電話会話終結部を構成しているのは、前終結と最終やりとりの機能単位が中心的なもので、成人に見られる人間関係の再肯定の機能単位はあまり使われていない(2)子供の電話会話終結部は成人に比べ使われる機能単位の種類・出現頻度・ターン数が少なく単純な構造になっている と言える。また、成人については藤原(1998)が日本人の文化的特異性としている「複雑さ」を見ることができた。

今回の調査は、最終的に終結まで至った最後の部分を分析したが、成人の電話会話ではこの部分に至るまで何回も前終結の手続きが生じては失敗を繰り返すという現象が見られた。次の例3の(1)は、前終結の失敗例で、(2)の前終結はうまく会話の終結に至った例である。子供にはこうした現象は限られた会話でしか見られず、失敗の繰り返し数もわずかである。したがって、こうした失敗部分まで考慮に入れて子供と成人を比較すると、成人の場合の方がはるかに複雑になっていることがわかる。

<例3> (C:女性30代 R:女性40代)

XX: 聞き取れない発話

- 1C: じゃすみませんけど
2R: はい
3C: ちょっともうちょっと考え [XX
4R: どうぞゆっくり考えて
5C: うん
6R: ご連絡ください
7C: すみませーん
8R: はい、 [じゃあまた・・・・・・・・ (1)
9C: [きょう遅くまでかかりました?
10R: え?
11C: きょうはかかりました? [かなり
12R: [あ、いやいやもうジュウ11時半頃終わったんじゃないかしら
13C: あ、ほんと [に
14R: [はいうん

- 15C：あ、すみませんご苦勞様でした
16R：あいいえとんでも [ない
17C：[うんは [一い・・・・・・・・・・・・・・・・ (2)
18R：[は一 [い
19C：[じゃあまた [XXXX
20R：[じゃあまたは一いは一い
21C：すみません
22R：ごめんください

子供の終結部が成人に比べて単純である理由として考えられるのは、成人に見られるような終結の過程は成人社会において良好な人間関係を維持する上で必要となる伝達様式で、子供はまだその様式を十分に習得していないこと、また子供社会の人間関係は成人社会の人間関係ほど複雑ではないことなどである。しかし、この点を明らかにするためには、さらに子供の発達段階を追った調査などが必要であろう。

最後に藤原（1998）と異なった点について述べる。藤原は小野寺（1992）に見られた最終のやりとりに代わる謝罪表現について、それらが、20代成人を被験者とする彼女のデータにはなかったことから、このようなケースを特殊なものと判断している。しかし、被験者の年齢層がこれより高い今回のデータではこうしたケースは多く見られた。また、人間関係の再肯定の機能単位の分布を見ると、子供、20代、20～40代と年齢をおうに従って、感謝の比率が減り、謝罪、依頼が増えていた。これらのことから、年齢を重ねるに連れて終結の方法が異なってくる可能性や、世代によっても方法が異なる可能性などが示唆される。

6. まとめと今後の課題

本稿では日本語の子供の電話会話終結部の特徴を明らかにするために、次の2点について子供と成人の電話会話を比較した。(1) 子供と成人では電話会話終結部を構成する機能単位に違いがあるか、(2) 子供と成人の間で、会話終結部構造の複雑さに差が見られるか。その結果、子供の電話会話終結部では成人ほど人間関係の再肯定の機能単位が使われず、機能単位の出現頻度・種類・ターン数のいずれも成人より少なく単純であるという特徴が見られた。冒頭で述べた子供の電話の切り方の「そっけなさ」は、成人が終結に際して人間関係を維持するために通常行う手続きを踏まない「終結部構造の単純さ」に起因しているといえるだろう。

最後に、今後の課題を述べる。まず、今回の調査は小規模であるため、この結果を

さらに確実なものにするためにはデータの数量的充実が必要である。次に、子供の会話終結部の単純さの要因を考慮にいれた調査が必要であろう。Holmesの指摘にある「子供がその伝達様式を十分に習得していない」という点や、藤原の結果との比較から示唆された年齢や世代による違いという点から、発達段階や年齢をおった調査が必要である。さらに、終結部構造に影響を与えると考えられる人間関係や電話の用件・目的なども今後考慮に入れるべき点であると考えられる。

注

1. 本稿では、「ターン数」については、あいづちを含む相手の発話またはポーズによって区切られた部分を1ターンとしてあらたに定義付け、数えた。藤原の定義とは異なる。
2. 藤原は、次の接触日時が明確に述べられているものとそうでないものを区別しているが、本稿では用例がないので区別しない。
3. 「人間関係の再肯定」のなかで「すみません」などの多種機能をもつ言葉は、本稿では文字どおりの意味をとることにした。
4. 「感謝」「謝罪」「依頼」の表現で会話が終了する場合は、Bの「人間関係の再肯定」に分類し、Cの「最終やりとり」ではこの要素のないものだけを対象とした。
5. 「わかった」は会話内容の理解を示すことで、トピックをまとめ、終結へ導いていると考え、「会話内容のまとめ」に分類した。

参考文献

- (1) 岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72号, pp.145-159
- (2) 岡本能里子・吉野文(1997)「電話会話における談話管理－日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析－」『世界の日本語教育』7, pp.45-60
- (3) 小野寺典子(1992)「エスノメソドロロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』第11巻9月号 pp.26-38
- (4) 熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』第11巻9月号 pp.14-25
- (5) 藤原智栄美(1998)「電話会話における終結部構造の日米比較」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第2号 pp.1-13

- (6) Bardovi-Harlig, K. and Hartford, B.A.S. et. al. (1991) Developing Pragmatic awareness: closing the conversation. *ELT Journal* Vol.45, pp.4-15
- (7) Clark, H. H. and French, J. W. (1981) Telephone goodbyes. *Language in Society* 10, pp.1-19
- (8) Holmes, J. (1981) Hello-goodbye: An analysis of children's telephone conversations. *Semiotica* 37, pp.91-107
- (9) Schegloff, E. A. and Sacks, H. (1973) Opening up closings. *Semiotica* 8, pp.289-327

(伊藤ーダイナミックビジネスカレッジ、杉山ー大東文化大学、八若ー立命館アジア太平洋大学、藤井ー横浜国立大学

An Analysis of Children' s Telephone Goodbyes: From the Viewpoint of Difference between Children and Adults

ITO Akiko, SUGIYAMA Masuyo,
HACHIWAKA Sumiko, FUJII Keiko

This paper examines how Japanese children close a telephone conversation.

The closing sections of 17 children' s telephone conversation and 16 adults' were compared for the difference in the elaborateness of their structure and the use of function units, which construct a closing section.

The results demonstrate the following difference between two groups:

1. Children use fewer function units in reaffirmation of acquaintance than adults.
2. The structures of children' s telephone goodbyes are not so elaborate as those of adults': with fewer frequencies and types of function units, fewer turns than adults'.

(ITO: Dynamic Business College, SUGIYAMA: Daito Bunka University, HACHIWAKA:
Ritsumeikan Asia Pacific University, FUJII: Yokohama National University)